

『改正北海道全図』

今号の掲載図は、明治二十年五月、内務省地理局刊行の『改正北海道全図』。縮尺五十万分の一で銅版ケバ表現による精密図(二〇〇%拡大)。明治十九年一月に開庁した北海道庁の設置を祝うようにして刊行された当時最高精度の北海道図である。この地図は、北海道庁の特に地理・地質・殖民地撰定の職域で規範となった地図である。

この地図の作成者である高橋不二雄は、明治十七年に、札幌県地形測量主任の福土成豊と、石狩川を遡り、水源の石狩岳や、ニセイカウシユツペ山、旭岳にも登頂し、北海道中央内陸部の経緯度実測に成功した。この踏査行の詳細な記録を『札幌真巡回日誌』として残した。

断章 旭川のアイヌ語地名研究

③1 高橋 基



この地図の大きな功績の一つは、現在の旭岳を石狩岳と呼称していたものを、石狩川水源の石狩岳として正したことがある。ただし、旭岳のアイヌ語名の又タフカウシペを案内人が知らず、もっぱらヲフタテシケ山と呼んだので、現在のオプタテ東ヲフタテシケ山としたのもこの

地図の特色である。

さて、明治二十年に上川郡の殖民地撰定の調査をした福原鉄之輔は、調査復命書で、掲載図の忠別川の「チュツペツ川」を漢字表記で「秩別川」とし、原野名を「秩別原野」と表記した。その後、北海道庁の刊行物では、忠別川を「チュツペツ」「ユツペツ」等と表記するようになった。

「チュツペツ」(cup-pet 太陽山)を意識して、「旭川」の地名誕生に結びつくのであるが、次号で詳述したい。

また、福原は、掲載図の「チカフニ」から、石狩川右岸の原野を「チカフニ原野」とし、これが後年「近文原野」となり、明治二十五年には「鷹栖村」が設置され、村名の起源ともなったのである。このように、この地図の影響力は大きかったのである。

なお、福原鉄之輔は石狩川せきしかりがわの状況を、「水性清浄、掬くスベシし魚族皆棲すまミ且多シ、滔々たうたう流

レま判舟通シテ『ペンケムム』(現・愛別町。ペンケムムナイ川)近傍二達スルヲ得。夏期涸水ノ際ハ、『ポロムム』(掲載図のホロモンム)『タナシ山』(現・比布町棚瀬山)ノ間、河線数条二分裂シ復タ上ル不可」と記述、石狩川右岸のこのポロムムが本連載二十八回の明治三十一年製版の北海道製図五万分一図に定着したのもと思われる。荒井源次郎翁も、「ポロムムは、護国神社のあたりをいつた(地名調査同行記「萩中美枝と述べたことも追記)しておきたい。

前回紹介した、松浦武四郎、ライマン、松本十郎、そして、明治二十三年に旭川を調査した永田方正が、「フーレペツ」(hure-pet 赤川)―石狩川ノ旧流ニシテ古ハ赤川ナリシガ今ハ清水ニシテ赤川ニアラス」と地名解したフーレペツが、右のポロムムと同一地点の異称だった可能性もある。いずれにしても、石狩川の牛朱別川合流点から、オサラツペ川合流点までは、往時の流路が非常に複雑で、今後とも調査・研究が必要と痛感している。

※毎月第一週号に掲載します